

近畿漢詩連盟會報

五月廿一日
發行
近畿漢詩連盟會報
編輯
近畿漢詩連盟會報



新会長挨拶

佐藤峰雄（永陵）

昨年の総会の議決を経まして、この度、近畿漢詩連盟会長に就任することになりました佐藤峰雄でございます。もとより綿力薄材の身であります。日本の漢詩文化・文人文化継続発展のため、尽力してまいりたいと存じます。

今後は山内前会長をはじめ新役員の諸先生そして会員の皆様のご支援ご協力を得まして、会運営を進めていく所存です。よろしく願います。

さて、「近畿漢詩連盟会報」も24回目を迎えるにあたりまして、会報という形式をとりつつ、新たに「会員の漢詩集」という形式に変更させていただくことにいたしました。ご理解のほどよろしく願います。

幸いに、予想を上回る百人以上の玉作が集まったこと、また、若い人たちの投稿が多く、特に小学生の投稿はたいへんうれしく思っております。しかしながら、応募作品の中には「近畿漢詩連盟作詩基準」からは少し逸脱する作品も散見されましたが、作者の詩意を尊重して、そのまま掲載いたしました。



掲載にあたりましては、作品の平等性を鑑み、役員・会員の順を廃して五十首順といたしました。

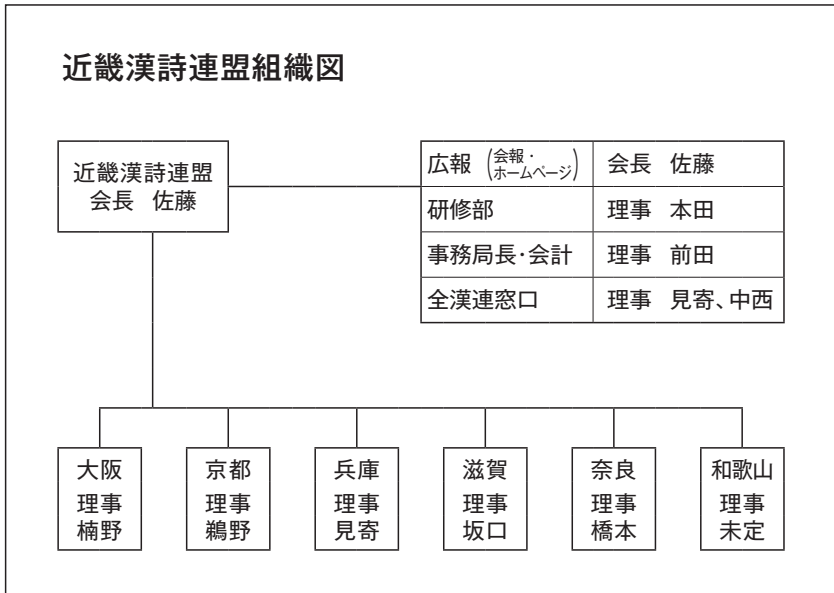
今後は皆様のご意見を踏まえながら、より充実した会報としてまいりたいと思っております。

今後ともよろしくお願いいたします。

今後の近畿漢詩連盟の運営にあたりましては、「吟行会」や「研修会」等を企画し、会員皆様に喜ばれる組織を目指していきたいと考えています。

当会の更なる発展のため、会員の増加のご協力をお願いいたします。

近畿漢詩連盟組織図



新年作

梅花鶯語草堂春
小院耽吟月半輪
客到茶煙有炉上
祝盤共樂賀正人

新年の作

梅花鶯語草堂の春
小院吟に耽れば月半輪
客到りて茶煙炉上に有り
祝盤共に楽しむ賀正の人

荒井みどり

春眠

煙雨寂無声
深更夢亦平
幽庭花落否
傍枕待新晴

春眠

煙雨寂として声なく
深更夢亦平らかなり
幽庭花落つるや否や
枕に傍いて新晴を待つ

飯田正仁

百事委風塵

陋屋年将暮
清貧白髮新
光陰如此早
百事委風塵

石翁 石野容三

百事 風塵に委ねん

陋屋 年将暮れんとす

清貧 白髮新たなり

光陰 此かくの如き早ければ

百事 風塵に委ねん

散步道

雨過雲去四隣暉
桂林離宮翠映輝
一坐優然心氣爽
伴妻畔路踏苧歸

散步道

雨過ぎて 雲去り 四隣暉き
桂林の離宮 翠 輝はに映える
一坐 優然 心氣爽やかに
妻を伴い 畔路 苧を踏みて歸す

今西 進

春嵐 植田隆三

山寺観楓

山寺尋来箕面郷
如燃霜葉映斜陽
停筇朗誦樊川句
尽日清遊世事忘

山寺観楓

山寺尋来る 箕面郷
燃が如く霜葉 斜陽に映ず
筇を停て朗誦 樊川の句
尽日清遊して 世事を忘る

山寺観楓

古刹山門扣木扉
巨巖黙坐圧周圍
老楓繁衍誇紅葉
竜虎相和満院輝

山寺観楓

古刹の山門 木扉を扣く
巨巖 黙坐し 周圍を圧す
老楓 繁衍し 紅葉を誇る
竜虎 相和し 満院輝く

白田諄司

延彩 宇都宮登美江

春日遊山寺

山門老樹礼空王
塵外深閑向艷陽
叢林春禽清淨地
松風謾謾俗情忘

春日遊山寺

山門老樹 空王に礼す
塵外深閑として 艷陽に向う
叢林春禽 清淨の地
松風 謾謾 俗情を忘る

年賀

仰見西山連翠微
村墟古社繡衣圀
昏迷世相憂多難
偏願安寧礼拝帰

年賀

高正 鵜野高資
仰ぎ見る 西山 翠微を連ね
村墟の古社 繡衣圀む
昏迷の世相 多難を憂い
偏えに安寧を願いて 礼拝して帰る

秋暮散策

村莊細菊一庭香
山頂飛鳶麗夕陽
步步林間鳴鹿散
趣時処処惜秋光

秋暮散策

村莊の細菊 一庭香し
山頂の飛鳶 夕陽麗らかなり
林間を歩々すれば 鳴鹿散じ
趣時 処処にあり 秋光を惜しむ

浦澤嘉子

新秋吟

月光処処滿乾坤
故国江山草樹繁
欲語無言只多感
新涼風爽坐幽軒

新秋吟

月光 処処 乾坤に満ち
故国の江山 草樹繁し
語と欲して言なし 只 感多し
新涼 風爽やかにして 幽軒に坐す

大串みと

大久保貫山

初夏草堂

野竹幽蔭遠市塵
雨余春尽昼蕭然
時聞檐下風鈴響
唯倚人間不用禪

初夏草堂

野竹の幽蔭 市塵遠く
雨余 春尽きて 昼 蕭然たり
時に聞く 檐下 風鈴の響くを
唯だ倚る 人間 不用の禪

菖直 大坪好徳

御題「和」

伝聞妄動 閱風波
世事紛紛 凝想多
可患鬪争 随处起
唯偏静穩 祈平和

御題「和」

伝え聞く妄動 風波を閱す
世事 紛紛 凝想多し
患える可し鬪争 随处に起り
唯だ偏に静穩 平和を祈るのみ

黒部堰堤避暑

懸崖溪谷緑陰鮮
突兀放流如瀑布
与友弄風忘酷暑
彩虹喜得仰山巔

黒部堰堤避暑

懸崖の溪谷 緑陰鮮やかに
突兀たる放流 瀑布の如し
友と風を弄すれば 酷暑を忘れ
彩虹 喜び得て 山巔を仰ぐ

岡田晴美

山寺観楓

山峰層壘白雲深
曲曲登来古刹澗
石径回頭楓樹錦
遥望勝景散秋陰

山寺観楓

山峰 層壘たり 白雲深し
曲曲 登り来る 古刹の澗
石径 回頭す 楓樹の錦
遥かに望む勝景 秋陰を散ず

風声 小川弘二

秋夜吟

雨余林径自清凉
依旧苔痕一草堂
独坐醉吟孤月下
故人偶到夜烧香

秋夜吟

雨余の林径 自ずから清凉
旧に依る 苔痕 一草の堂
独り坐し 孤月の下に酔吟すれば
故人 偶たま到りて 夜 香を焼く

奥田美穂

秋夜偶感

秋風瑟瑟早凉生
月透紗窓夜色清
灯火可亲耽玩読
桂花一笑使人驚

秋夜偶感

秋風 瑟瑟 早凉生じ
月は紗窓に透りて 夜色清し
灯火 親しむ可く 玩読に耽る
桂花 一笑 人をして驚か使む

敞新風 鹿兒島秀夫

御題「和」

今朝迎歳自為欽
更以希望互礼深
盟友和親心爽快
歡談笑語勝千金

御題「和」

今朝歳を迎えて 自ずから欽を為す
更に希望を以て 互礼深し
盟友 和親なり 心 爽快
歡談 笑語して 千金に勝るを

菖関 梶田孝道

述懐

偏慳歲月日披書
自識依然腹笥虚
傍在幼孫如一笑
破顔我亦斂眉舒

述懐

偏えに歳月を慳して 日に書を披くも
自ら識る 依然として 腹笥虚しきを
傍に幼孫在りて 一笑するが如し
破顔 我も亦 斂眉舒ぶ

竹泉 片岡和子

晩秋訪友

早晨来訪故人家
黄菊嫣然满短垣
枫叶翩翩当好日
吟诗煎茗笑言温

晩秋友を訪ぬ

早晨来訪す 故人の家
黄菊 嫣然として 短垣に満つ
枫叶 翩翩 当に好日なるべし
詩を吟じ 茗を煎れば 笑言温かなり

勝本公子

早春感偶

今迎壮健頌禧春
拝謝天恩感更新
立志欲窮貞静徳
雄心無累弄毫人

早春感偶

今迎える 壮健 禧春に頌す
天恩に拝謝し 感 更に新なり
志を立て 窮めんと欲す 貞静の徳
雄心 累無く 毫人を弄す

加藤初恵

月夜郎君烹飪

蒸氣騰騰肌白柔
粗餐包子味優優
褒辞喜喜君朧月
天鏡明明華髮愁

月夜の郎君 烹飪する

蒸氣は騰騰 肌は白く柔らか
包子は粗餐にして 味 優優たり
褒辞に喜喜する 君は朧月
天鏡は明明す 華髮が愁う

加茂とみこ

観楓

日和出戸四圀閑
携杖襲衣登故山
鳥瞰頂高楓樹彩
時平心究忘塵寰

観楓

日和やかにして戸を出る 四圀閑たり
杖を携え衣を襲ね 故山に登る
頂高より鳥瞰する 楓樹の彩り
時に平心究まり 塵寰を忘る

雲周 川浦吉和

川勝芳三

偶感

回頭八十有餘年
苦樂人生歲月遷
老至功名空未得
守身知足意悠然

偶感

頭を回らせば 八十有餘年
苦樂の人生 歲月遷る
老至りて 功名 空しく未だ得ず
身を守り 足を知りて 意悠然たり

探梅雜詠

春郊十里雨晴天
破蕾紅葩帶野煙
不背佳人幽雅極
清心勃勃染詩箋

探梅雜詠

春郊 十里 雨晴るるの天
蕾を破る紅葩 野煙を帯ぶ
背かず佳人 幽雅の極むるを
清心 勃勃 詩箋を染む

青峯 川島峯子

暑日読書

炎蒸日午南柯夢
醒悟唯聞童稚呼
独坐風簷涼一味
清閑繙卷是吾娛

暑日読書

炎蒸の日午 南柯の夢
醒悟し 唯だ聞く 童稚の呼ぶを
独り風簷に坐せば 涼一味
清閑 卷を繙とくは 是れ吾が娛しみ

河村澄子

秋夜吟

良宵唧唧草虫周
庭上芬芬桂氣幽
白露侵衣秋夜永
回頭万頃月光流

秋夜吟

良宵 唧唧 草虫周く
庭上 芬芬 桂氣幽なり
白露 衣を侵し 秋夜永く
頭を回らせば 万頃 月光流る

川村良子

菊池睦子

述懐

早晨散策看連峰
秋去村園霜氣濃
葉尽寒来歸一寂
何知排悶後凋松

述懐

早晨散策して連峰を見る
秋去りて村園霜氣濃かなり
葉尽き寒来りて一寂に歸す
何ぞ知らん悶を排す後凋の松

承志

翰墨揮毫朋友多
仲秋寧樂秀吟羅
生涯詩作惟遺訓
天火同人詠頌歌

承志

翰墨揮毫朋友多し
仲秋の寧樂秀吟羅なる
生涯詩作惟れ遺訓
天火同人頌歌を詠ぜん

雲臥 北尾正樹

祖山安居三十周年

祖山安居三十周年

木谷和雄

老木垂条古仏宮

老木 条を垂る 古仏宮

鐘声隱隱渡長空

鐘声 隱隱として 長空を渡る

星霜三十如殘夢

星霜 三十 殘夢の如く

釣月耕雲感慨中

釣月 耕雲 感慨の中

鷺冠 北村恭一

觀楓

觀楓

洛陽東岳永觀堂

洛陽 東岳 永觀堂

院裏秋深映夕陽

院裏 秋深くして 夕陽に映える

満目紅楓無限好

満目の紅楓 限り無く好く

焚香古刹是仙郷

香を焚く古刹 是仙郷

祝結婚

山光水色楽残春
湖上双舟出港晨
鳳凰和鳴花影静
蓬萊風伯結婚姻

結婚を祝す

山光 水色 残春を楽しみ
湖上の双舟 港を出るの晨
鳳凰 和鳴して 花影静かに
蓬萊の風伯 婚姻を結ぶ

木村眞由美

天橋立

分海沙汀一路通
千年松樹画屏中
秋光吟屐遅遅緩
追艇白鷗西又東

天橋立

海を分つ沙汀 一路通じ
千年の松樹 画屏の中
秋光の吟屐 遅遅として緩く
艇を追う白鷗 西又東

木村輝美

晩秋訪紀州

晩秋 紀州を訪ぬ

木村繭美

蒼天映海一望平
南橘山容秋氣清
坐待夕陽風籟爽
潮光点点釣舟橫

蒼天 海に映じて 一望平らかに
南橘の山容 秋氣清し
坐るに夕陽を待てば 風籟爽やかに
潮光 点点 釣舟横たわる

中秋看月

中秋看月

櫛谷元紀

檐馬丁東木葉飄
虫声滿地自蕭寥
拳頭円鏡明如昼
白兔跳梁到半宵

檐馬丁東 木葉飄がえり
虫声地に滿るも 自ら蕭寥
頭を拳ぐれば円鏡 明きこと昼の如し
白兔 跳梁 半宵到る

流星

東風草木十分春
五五三三步步人
又見天空無月夜
流星山上一詩親

流れ星

東風草木十分の春
五五三三歩歩の人
又見る天空 無月の夜
流星 山上 一詩親しむ

久保澄晴すばる
(小学四年)

故園懐旧

叡山雲散悠然在
霜葉兩岸縹緲堤
草屋荒涼人已去
須臾感旧石橋西

故園懐旧

叡山 雲散じて 悠然として在り
霜葉の兩岸 縹緲の堤
草屋 荒涼として 人已に去り
須臾 旧を感じず 石橋の西

小杉るい

早春偶成

茅屋春回早
鶯声梅一枝
江南天地好
買醉月来时

早春偶成

茅屋 春回ること早く
鶯声 梅一枝
江南 天地好く
酔を買いて 月来る時

五代文男

牽牛花

昨夜双星離別情
今朝花上淚盈盈
風檐独坐虫声細
秋自牽牛籬落生

牽牛花

昨夜 双星 離別の情
今朝 花上 涙盈盈たり
風檐 独り坐せば 虫声細し
秋は牽牛の籬落より生ず

琴泉 小林順子

風懷

斜陽暖暖聽殘蝸
野客施施伴寂寥
馥郁桂華秋興洞
遠山遙望坐良宵

風懷

斜陽暖暖殘蝸を聴き
野客施施寂寥を伴う
馥郁たる桂華秋興よか洞く
遠山遙かに望んで良宵に坐す

小筆鳳外

歳晚市塵

迎宵已整万灯紅
旗店連軒醉客充
路上摩肩談笑溢
一城鬧熱颺寒空

歳晚市塵

宵を迎え已に整う万灯紅なり
旗店軒を連ね酔客充つ
路上肩を摩し談笑溢れ
一城の鬧熱寒空に颺る

瑞峰 小松康一

齊藤記代子

登夏山

求涼登友比良山
積翠花蹊心自閑
風冷過襟幽鳥叫
白雲片片是仙寰

夏山に登る

涼を求め友と登る 比良の山
積翠 花蹊 心自ずから閑なり
風冷やかに襟を過ぎ 幽鳥叫び
白雲 片片たり 是れ仙寰

西面和子

江上遇吟

青波十里櫓声鳴
垂楊流螢江上行
明月煌煌秋已近
清風徐到一身輕

江上遇吟

青波 十里 櫓声鳴き
垂楊 流螢 江上に行く
明月 煌煌として 秋已に近く
清風 徐に到れば 一身輕し

炉辺読書

炉辺書を読む

亮綜 坂本敏一

冬夜沈沈寒意生
炉辺添炭一瓶烹
独繙史卷興無限
灯火不眠耽目耕

冬夜 沈沈 寒意生ず
炉辺 炭を添え 一瓶烹る
独り史卷を繙き 興限り無く
灯火眠らず 目耕に耽る

感秋

秋を感じず

澹水 坂口康一

唧唧虫声聴古堂
秋庭白輝桂花香
樹間眺月幽玄刻
独楽夜長芳酒觴

唧唧たる虫声 古堂に聴き
秋庭 白く輝き 桂花香る
樹間 月を眺める 幽玄の刻
独り夜の長きを楽しむ 芳酒の觴

梅雨待友

模 糊 細 雨 破 窓 侵
日 夕 輕 寒 夏 未 深
為 友 設 筵 茶 可 煮
待 望 啄 啄 扣 門 音

梅雨友を待つ

模 糊 たる 細 雨 破 窓 を 侵 す
日 夕 輕 寒 夏 未 だ 深 から ず
友 の 為 に 筵 を 設 え 茶 煮 る べ し
待 ち 望 む 啄 啄 と 門 を 扣 く の 音

桃 菊 坂 口 鶴 龜

中秋賞月

十 三 夜 月 寄 欄 干
庭 院 西 風 琴 獨 彈
未 到 報 書 人 健 否
桂 花 散 盡 思 無 端

中秋賞月

十 三 夜 月 欄 干 に 寄 り
庭 院 西 風 琴 獨 り 彈 く
未 だ 到 ら ず 報 書 人 健 な る や 否 や
桂 花 散 じ 尽 し て 思 端 な し

崎 山 邦 子

雲淑 佐々木淑子

晚霽見螢

信歩消憂晚霽庭
微風含湿緑苔香
暖然竹裏湛涼氣
隱映輕飛惚見螢

晚霽螢を見る

歩に信せて消憂 晚霽の庭
微風 湿を含んで 緑苔香る
暖然たる竹裏 涼氣を湛え
隱映 輕飛 惚として螢を見る

元旦対鏡

烏兔匆匆徒七秩
随雲従水一身閑
元朝兀坐対明鏡
半有温顔半醜顔

元旦 鏡に対す

永陵 佐藤峰雄
烏兔 匆匆 徒に七秩なれど
雲に随い水に随いて 一身閑たり
元朝 兀坐して 明鏡に対すれば
半ば温顔あり 半ば醜顔

寿新春

几頭筆硯 惠風吹
先慶三元 自詠詩
米寿身生 唯足夢
前途習習 醉金卮

新春を寿ぐ

几頭の筆硯 惠風吹き
先ず三元を慶して 自ら詩を詠ず
米寿の身生 唯だ夢め足り
前途 習習 金卮に酔う

澤村宗一

緑陰読書

鶯語声声 新緑繁
白藤引蔓 坐南軒
吟朋相会 繙書卷
拈句論詩 忘世煩

緑陰読書

鶯語 声声 新緑繁く
白藤 蔓を引いて 南軒に坐す
吟朋 相い会して 書卷を繙く
句を拈り 詩を論じて 世煩を忘る

州蓉 高橋順子

賽靖国神社

二百万余無限悲
妙年尊命涙如糸
遺書遺影歸心切
感謝平和留一時

靖国神社を賽す

二百万余無限の悲しみ
妙年尊命涙糸の如し
遺書遺影歸心切なり
平和に感謝して留まること一時

梢蘭 田中知子

新歳偶感

迎得令和歳甲辰
爽涼旭日浄無塵
老梅不仮東風力
香氣満天禅寺春

新歳偶感

迎え得たり令和甲辰の年
爽涼の旭日浄く塵無し
老梅東風の力を仮りず
香氣天に満つ禅寺の春

谷 玄康

春朝偶感

万桜歴乱泛瑤池
垂柳揺風春緑時
坐聴嫩鶯声咋咋
今朝佳気有心期

春朝偶感

万桜 歴乱して 瑤池に泛び
垂柳 風に揺れる 春緑の時
坐して聴く 嫩鶯 声咋咋たるを
今朝の佳気 心期有り

田畑明彦

迎杖朝有感

退職忘憂二十年
加齢不識杖朝天
祝詞同好我驚駭
賦詠交歓残日円

杖朝を迎えて感有り

退職忘憂 二十年
加齢識らず 杖朝の天
同好の祝詞 我驚駭
賦詠 交歓 残日円なり

雲郷 田村 功

白遊 堤 清子

初冬遇吟

霜 舖 郊 外 入 初 冬
秋 去 前 庭 落 葉 重
今 夕 如 何 寒 尚 薄
老 軀 一 啜 茗 香 濃

初冬遇吟

霜 舖 く 郊 外 初 冬 に 入 り
秋 去 る 前 庭 落 葉 重 なる
今 夕 如 何 ぞ 寒 尚 薄 く
老 軀 一 啜 す れ ば 茗 香 濃 や か な り

雲 楽 堂 本 甚 太 郎

難波橋

難 波 人 屋 葦 莖 焚
宅 宇 黒 楹 興 火 薰
獅 子 橋 傍 娘 出 産
煤 妻 可 愛 倍 思 君

難波橋

難 波 人 屋 に て 葦 莖 焚 き
宅 宇 の 黒 楹 火 薰 を 興 す
獅 子 橋 傍 娘 出 産
煤 妻 可 愛 く 倍 君 を 思 っ ます

嶺北 中島俊克

聽雨

竹屋無聊臥看雲
幽庭寂寂雨花薰
黃昏閑酌檐声細
倚机詩成一炷焚

雨を聴く

竹屋 無聊 臥して雲を見る
幽庭 寂寂 雨花薰る
黃昏 閑酌すれば 檐声細やかなり
机に倚れば 詩成りて 一炷を焚く

國峰 中西 倭

曉起聞鶯

寒村曉起白梅橫
一朶玲瓏映水明
此境中心真絶景
遊人共聽野鶯鳴

曉起鶯を聞く

寒村 曉起すれば 白梅よこ横たい
一朶 玲瓏として 水に映じて明らかかなり
此の境 心にあた中りて 真に絶景
遊人 共に聴かん 野鶯の鳴くを

嵐山晩秋

嵐山溪澗板橋霜
流水晶晶穿石光
紅樹晚秋看不尽
人間俗事暫時忘

嵐山晩秋

嵐山の溪澗板橋の霜
流水 晶々として 石を穿いて光る
紅樹の晩秋 看れど尽きず
人間の俗事 暫時忘る

中村清寿

秋夜吟

浅紅山影夕陽収
月下涼風桂氣幽
可惜多情眠未就
時能酌酒共清遊

秋夜吟

浅紅の山影 夕陽収まり
月下の涼風 桂氣幽なり
惜しむべし 情多くして 眠未だ就らずを
時に能く 酒を酌んで共に清遊せん

西口唯

秋日偶成

西郊早曉步清霜
池畦黃花獨自芳
時聽松間禽唱響
紅塵百慮暫時忘

秋日偶成

西郊の早曉 清霜を歩せば
池畦の黃花 獨り自ずから芳ばし
時に聽く 松間 禽唱の響
紅塵 百慮 暫時忘る

足人 根本みきこ

中秋對月

金風颯颯一天秋
雲去西郊白兔浮
回首故山千里外
獨懷朋友奈鄉愁

中秋 月に対す

金風 颯颯 一天の秋
雲は西郊に去りて 白兔浮ぶ
首を回らせば 故山 千里外
獨り朋友を懷いて 郷愁を奈せん

野田三郎

野村悦子

毘沙門堂節分会

毘沙門堂 節分会

蒼穹 葺宇 五雲 中
院落 香台 瑞氣 籠
燠燠 醴漿 思逝 水
儼儼 聚萃 送春 風

蒼穹 葺宇 五雲の中
院落 香台 瑞氣籠む
燠燠たる醴漿 逝水を思い
儼儼たる聚萃 春風を送る

白崎海岸

白崎海岸

萩原伊玖子

蒼天 碧海 共相 融
皎皎 奇岩 鷹舞 空
舟揺 金波 映斜 日
独洗 雑念 笑潮 風

蒼天 碧海 共に相融け
皎皎たる奇岩 鷹 空に舞う
舟は金波に揺れて 斜日に映じ
独り雑念を洗いて 潮風に笑う

雲外 橋本征一

秋宵作詩

戸外 蛩声 秋気 充
今宵 澄月 景熊 熊
牀前 独坐 耽詩 作
並句 推敲 八十 翁

秋宵詩を作る

戸外の蛩声 秋気充ち
今宵 澄月 景熊熊
牀前 独坐し 詩作に耽り
句を並べ推敲す 八十の翁

橋野裕文

小春吟

初寒 愛日 白雲 重
朔水 茶花 翠色 濃
曝背 南軒 鷄犬 静
小春 已看 旧時 容

小春吟

初寒の愛日 白雲重なり
朔水の茶花 翠色濃やかなり
曝背の南軒 鷄犬静かに
小春 已に看る 旧時の容

新年初懐

幽窓冷氣早朝閤
池畔鯉跳看藻疎
驚竹微風水紋発
新禧鶏旦老姿余

新年初懐

幽窓の冷氣 早朝の閤
池畔 鯉跳ねて 藻の疎なるを看る
竹を驚かす微風 水紋発し
新禧の鶏旦 老姿余す

長谷川左多

雨後閑日

小庭寂寂落花繁
今夕軽寒郭外村
初見荷風疎雨過
煮茶静坐避塵喧

雨後閑日

小庭 寂寂 落花繁く
今夕の軽寒 郭外の村
初めて見る荷風 疎雨過ぎ
茶を煮 静かに坐して 塵喧を避く

服部あさ子

徠山原肇

冬夜偶吟

寒灯明滅漏声遅
独坐空齋冷透肌
遮莫顔唐吟骨瘦
淪茶一啜又敲詩

冬夜偶吟

寒灯 明滅して 漏声遅く
空齋に独坐すれば 冷 肌を透る
遮莫 顔唐して 吟骨瘦るも
淪茶 一啜 又た詩を敲く

日根野卓

除夜鐘声

寒空凍樹歳除中
微雪村郊古梵宮
賽客偏希身尚健
鐘声百八待春風

除夜鐘声

寒空の凍樹 歳除の中
微雪の村郊 古梵宮
賽客 偏に身の尚お健なるを希い
鐘声 百八 春風を待つ

御室逍遙

仰見羊腸徑
全山尽霜楓
尊顏八十八
恭有仏龕中

御室逍遙

仰ぎ見れば 羊腸の徑
全山 尽く霜楓
尊顔 八十八
恭しく仏龕の中に有り

平木寿寿美

秋夜偶成

虫声処処夜闌干
月白蕭条天地寬
漠漠追憶朋友信
千秋往事思無端

秋夜偶成

虫声 処処 夜 闌干
月は白く 蕭条として 天地寬し
漠漠 追憶 朋友の信
千秋の往事 思い端なし

広瀬幸子

甲辰元旦作

歲朝旭日 拜明時
賽社催詩 坐喫茶
何料能州 天地動
落橋割野 破長陂

甲辰元旦作

歲朝の旭日 明時に拜し
社に賽し 詩を催して 坐に茶を喫す
何ぞ料らんや 能州 天地動きて
橋を落し 野を割き 長陂を破るとは

藤田彩月

玉魄満山川

秋冷沈沈 夜
風吹雲散 天
楓紅同正 好
玉魄満山川

玉魄 山川に満つ

秋冷やかに 沈沈たる夜
風吹きて 雲 天に散ず
楓紅 同に正に好く
玉魄 山川に満つ

法貴博光

拜王右軍翰墨

王右軍の翰墨を拝す

堀 牧子

春風十里夢猶存
事事恍然步賜園
書翰當優思不盡
臨池為黒坐南軒

春風 十里 夢猶お存じ
事事 恍然として 賜園を歩む
書翰 當に優なるべし 思い尽きず
池に臨んで、黒と為し 南軒に坐す

春日逍遙

春日逍遙

本多佳奈

行尋水寺緑苔新
塔影鐘声柳映津
嫋嫋爽風梨雪散
惜花賞月醉歸人

行々水寺を尋ぬれば 緑苔新に
塔影 鐘声 柳 津に映ず
嫋嫋たる爽風 梨雪散じ
花を惜み 月を賞す 醉歸の人

肥後大震災

肥後大震災

湖舟 本田裕志

災禍襲来驚十方
山川崩壊水雲郷
深更寒気無眠食
余震再三 人絶腸

災禍襲来 十方驚く
山川崩壊す 水雲の郷
深更の寒気 眠食なく
余震再三 人腸を絶つ

宝寺節分会

宝寺節分会

前田正子

鳥雀群飛寒氣中
早梅含笑梵王宮
弘邪招福喚春祭
四海齋弥平治風

鳥雀 群飛す 寒氣の中
早梅 笑を含む 梵王宮
邪を払い 福を招いて 春を喚ぶ祭
四海 齋しく弥る 平治の風

月夜読書

月夜読書

升方恵子

前庭虫語満清秋
月照桂花孤雁流
樹竹映窓耽夜読
新寒入袂転催愁

前庭の虫語 清秋に満ち
月は桂花を照らし 孤雁流る
樹竹 窓に映じて 夜読に耽り
新寒 袂に入りて 転た愁を催す

雨中聴簷鈴

雨中 簷鈴を聴く

松山侑弘

蕭蕭曉雨湿苔庭
穆穆老椿花易零
不管春天曇亦霽
禅堂独坐聴簷鈴

蕭蕭たる曉雨 苔庭を湿し
穆穆たる老椿 花 零ち易し
管せず 春天 曇亦霽
禅堂 独り坐して 簷鈴を聴く

三浦昭爾

訪知覽特攻平和会館

知覽特攻平和会館を訪ぬ

特攻 出撃 決心 羈

特攻の出撃 決心の羈

奉母 遺書 暗涙 垂

母に奉ぐ 遺書に 暗涙垂る

烈士 献身 徒死 極

烈士の献身 徒死の極

過行 所在 可深 思

過行の所在 深く思うべし

三木 毅

早春探梅

早春探梅

寒風 吹過 一村 晨

寒風 吹き過ぐ 一村の晨

枯木 枝頭 見美 人

枯木の枝頭 美人を見る

初識 乾坤 春已 至

初めて識る乾坤 春已に至るを

悠然 漫步 自清 新

悠然 漫步して 自清新たり

村家晩春

孤村麦浪若清漣
四望鯉旗泳碧天
讀去詩書心自爽
新茶静喫夕陽前

村家晩春

孤村の麦浪 清漣の若く
四望の鯉旗 碧天を泳ぐ
詩書を読み去れば 心 自ずから爽やかなり
新茶 静かに喫す 夕陽の前

三崎知子

偶感

葉上蝸牛歩不軽
梅霖鬱鬱暗雲横
人生八十無功績
駑馬雖遲任意行

偶感

葉上の蝸牛 歩軽かならず
梅霖 鬱鬱 暗雲横たわる
人生八十 功績なし
駑馬遅しと雖も 意に任せて行かん

緑新風 三島弘孝

迎新年

新正迎得瑞雲新
食餅傾杯詩酒親
淑氣欣欣初日上
身辺物換守清貧

新年を迎う

新正 迎え得て 瑞雲新なり
餅を食し杯を傾け 詩酒に親しむ
淑氣 欣欣 初日上る
身辺 物換るも 清貧を守る

摂卓 水野 卓

夏日偶成

長天雨洗早涼生
山静無人歩午晴
巖巖積雲風有影
消閑最好只蝉声

夏日偶成

長天 雨は洗って 早涼生ず
山静かに 人無く 午晴に歩す
巖巖たる 積雲 風に影あり
消閑 最も好し 只だ蝉声

頌彩 溝垣弘子

簗島訓子

閑日娛春

曲肱午日望青霄
徂春牡丹猶未凋
蝶舞鶯鳴新翠滴
薰風一路白雲飄

閑日娛春

肱を曲げる午日 青霄を望み
徂春の牡丹 猶お未だ凋まず
蝶は舞い 鶯鳴いて 新翠滴たり
薰風の一路 白雲翻る

新秋即時

山嶺黎明碧落柔
爽風撫頰感初秋
作群遊鳥向江舞
婉轉詩情心自悠

新秋即時

山嶺の黎明 碧落柔らかに
爽風 頰を撫で 初秋を感じ
群を作す遊鳥 江に向かいて舞い
婉転たる詩情 心自ずから悠なり

梢慶 三保和美

江月 三宅貴江

晩秋独酌

晩秋独酌

晩秋湖上月蒼蒼
瑟瑟虫声夜更长
酌酒泛英彭沢興
題詩幽室菊花香

晩秋の湖上 月蒼蒼
瑟瑟たる虫声 夜更长し
酒を酌み英を泛かべる 彭沢の興
詩を幽室に題し 菊花香し

看狂花

凝陰日午似春華
乘興曳筇村路斜
残柿色丹群鳥噪
寒梢白玉是桜花

狂花を見る

稻村 見寄権次郎

凝陰の日午 春華に似たり
興に乗じて 筇を曳けば 村路斜めなり
残柿 色丹く 群鳥噪ぎ
寒梢の白玉 是れ桜花なり

村林由貴

春朝

煙靄湿鶯声
寬然花滿城
無人唯静謐
坐榻待清晴

春朝

煙靄 鶯声を湿し
寬然として 花 城に満つ
無人 唯 自ずから静かに
榻に坐し 清晴を待つ

新年偶作

乾坤自改日瞳瞳
惟願安寧椒酒中
七十余年雖莫績
一吟精励気魂隆

新年偶作

乾坤自ら改まる 日瞳瞳
惟願う安寧 椒酒の中
七十余年 績なしと雖ども
一吟精励して 気魂隆し

雲 颯 森 順道

登夏山

盟友同行挑夏山
道程險阻甚難攀
乱呼我額淋漓汗
立頂驚歎蒼莽間

夏山に登る

盟友同行し 夏山に挑む
道程險阻にして 甚だ攀じ難し
呼は乱れ私の額 淋漓の汗
頂に立ち驚歎 蒼莽の間

常峰 森岡常又

上墓秋日

紅葉村莊小径斜
一庭閑癸一黄花
清香漾漾重陽節
上墓先人秋色嘉

上墓秋日

紅葉の村莊 小径斜めなり
一庭 閑かに癸く 一黄花
清香 漾漾 重陽の節
先人に上墓すれば 秋色嘉し

森川珠房

看菊花

豪華妍麗菊千莖
玉蕊方開香氣盈
愛育丹誠飲不淺
重陽招友醉秋榮

看菊花

豪華妍麗菊千莖
玉蕊方に開き 香氣盈つ
愛育丹誠 飲び浅からず
重陽に友を招き 秋榮に酔う

紫暹 森下泰行

中秋賞月

猿沢周遊池上辺
亭亭三五月明天
客愁吟子詩成処
夜坐金風復晏然

中秋賞月

猿沢周遊池上の辺
亭亭たる三五 月明の天
客愁の吟子 詩成る処
夜 金風に坐して 復晏然たり

柳井孝三

城北菖蒲園

薰風吹遍搖菖蒲
清艷芳姿花卉濡
雨余別格景觀麗
城北公園興不孤

城北菖蒲園

薰風吹き遍く 菖蒲を揺らし
清艷芳姿 花卉濡う
雨余別格 景觀麗わしく
城北公園 興孤ならず

雲慧 山中照子

新旦口号

昨夜匆匆塵俗裏
今朝晃晃喜齡春
千門万户和歡宴
酌酒賦詩思更新

新旦口号

昨夜 匆匆 塵俗の裏
今朝 晃晃 喜齡の春
千門万户 歡宴に和し
酒を酌み詩を賦せば 思い更に新なり

山根比佐子

歳晚偶感

歳除門巷朔風寒
月下幽庭竹映欄
醉聽鐘声有余興
雖貧不曲樂無官

歳晚偶感

歳除の門巷 朔風寒く
月下の幽庭 竹 欄に映ず
酔いて聴く 鐘声 余興あり
貧と雖ども 曲せず 無官を楽しむ

山本由加利

雨中懷友

黄梅時節雨濛濛
庭院蕭然人影空
隱几廻頭雲樹念
思君一筆寄詩筒

雨中懷友

黄梅の時節 雨濛濛たり
庭院 蕭然 人の影空し
几に隠りて頭を廻らせ 雲樹の念
君を思い 一筆 詩筒に寄す

鎗尾尚美

陽泉 横山陽子

桂花香

村莊 処 処 至 新 涼
懷 旧 往 時 傾 一 觴
携 友 共 遊 秋 五 彩
好 風 嫋 嫋 桂 花 香

桂花香

村莊 処 処 新涼に至り
往時を懷旧して一觴を傾く
友を携え共に遊ぶ 秋五彩
好風 嫋嫋として 桂花香し

吉岡みゆき

禾穗与与

西 郊 晴 朗 近 重 陽
滿 地 搖 風 禾 穗 黃
唯 問 古 人 何 処 佇
正 祈 与 与 歲 豐 穰

禾穗与与

西郊 晴朗にして 重陽近く
滿地 風に揺れて 禾穗黄なり
唯だ問う古人 何処にか佇まん
正に祈らん 与与として 歳豊の穰なるを

秋社祭

雀跳滞穂穀収天
賽社行人屐響聯
絢爛山車連太鼓
歡呼吹笛是豐年

秋社祭

雀は滞穂に跳る 穀収の天
賽社の行人 屐響聯なる
絢爛たる山車に連太鼓
歡呼 吹笛 是れ豊年

学松 吉永学弘

杖朝

早春二月草初萌
一路探梅午步晴
有限人生天許所
吾齡八十仰光明

杖朝

早春二月 草初めて萌え
一路探梅 午步晴れる
有限の人生 天許す所
吾齡八十 光明を仰ぐ

雲岳 米田洋一

秋社

江山氣爽午風涼
田圃燦然新稻香
少婦丁男娛社日
囂囂鼓笛遶村長

秋社

江山氣爽かにして 晚風涼し
田圃 燦然として 新稻香し
少婦 丁男 社日を娛しみ
囂囂たる鼓笛 村を遶りて長し

甲藍 依藤秩帆

重陽即事

千姿菊 爨値重陽
滿地清澄 晚節香
双親既逝 少知己
我独登高望故郷

重陽即事

千姿菊爨いて 重陽に値う
滿地清澄 晚節香し
双親既に逝きて 知己少なれど
我独り高きに登り 故郷を望む

慧邦 渡邊正則

『河内名所図会』の漢詩

—生駒山人の詠んだ河内—

新 稲 法 子 (にいな のりこ)

中国ではもちろん、我が国でも名所を漢詩に詠んでいます。名所を訪れたとき、名作を思い浮かべて味わい、ときに口ずさんでみるのは、漢詩に親しんでいる者の楽しみの一つでしょう。

江戸時代に刊行された各地の名所図会は、名所を解説する際に現在でも引用される書物ですが、その精緻な挿絵には、しばしば名所にちなんだ和歌や俳諧、漢詩が書き込まれています。今回は『河内名所図会』の挿絵に記された漢詩をご紹介します。パソコンをお持ちの方は、国立国会図書館デジタルコレクションなどで江戸時代の版本を閲覧できますので、ぜひ画像と共にお楽しみください。

『河内名所図会』は、『都名所図会』で江戸時代に名所図会ブームを巻き起こした秋里籬島が一八〇一年に刊行した名所図会の一つです。七言二句も一首と数えると、挿絵には漢詩が五首記されています。ちなみに和歌は十五首、発句が二十八首で合計四十八首です。発句が多いのは籬島が俳人だったからでしょう。芭蕉や蝶夢の作の他、自らの作を九首用いています。

籬島は漢詩を収録するに当たって、河内を代表する漢詩人、生駒山人の『生駒山人詩集』を繙いたように思われます。卷二の葛城山、二子山（二上山）、卷四の大和川築留、稲田桃林の挿絵に添えられた生駒山人の作は、『生駒山人詩集』卷七の「河内八景」という連作の一部だからです。

生駒山人は一七二二年に河内の日下村の庄屋、森長右衛門の長男として生まれました。名は勝二郎、新助、真蔵。漢詩人としては生駒山人の名で知られ、日下世傑、孔文雄（孔は孔舎衛を中国風に修姓したもの）とも名乗っています。十一歳で大坂の商家野里屋の養子になりましたが、商売が性に合わなかったのでしょうか、二十二歳のとき日下村に戻り、四十一歳で生涯を終えました。

『生駒山人詩集』には河内の自然と暮らしを美しく詠み上げた作品が多く収められています。『河内名所図会』卷二「葛城山」に記されたのは、「河内八景」では「葛城雪擁 葛城雪擁す」と題する一首。

寒日微微行雁間 寒日 微微 行雁間なり

千尋雪擁葛城山 千尋 雪擁す葛城山

朝來尙遇孤溪上 朝來 尙 孤溪の上に遇はば

有客扁舟訪友還 客有りて扁舟友を訪ひて還へらん

雪に蔽われた葛城山、まばらに飛んでいく雁。朝方、谷川を行く船があるならば、友を訪ねて帰る旅人だろうというのは、『世説新語』任誕篇四十七や『蒙求』「子猷尋戴」によって伝わる王子猷の故事を踏ま

えているようです。

大雪の日、酒を飲み詩を吟じていた王子猷は、ふと友人戴安道に会いたくなり、小舟で山陰から剡までの距離をその宅に向かいます。しかし、門に到ると会わずにそのまま引き返したのです。いぶかしむ人に、子猷は、興に乗じて行き、興が尽きて帰るまでと答えたとか。

すべての音が白い雪に吸い込まれた静寂の中、音もなく進む一艘の小舟。究極の風流の世界といえましょう。

巻四「稲田桃林」も「河内八景」のうちの一首です。

誰家年少野村西

誰が家の年少ぞ野村の西

沙岸停舟路欲迷

沙岸舟を停めて路迷はんと欲す

十里桃林花未落

十里の桃林花未だ落ちず

始知身到武陵溪

始めて知る身は武陵溪に到るか

稲田村の桃は江戸時代には京大坂に出荷され、その名を知られていました。洪水などで次第に姿を消しましたが、近年地元の方たちによって復興されています。春には第二寝屋川沿いに美しい花を咲かせているようです。生駒山人が詠んだころは「十里の桃林」とあって、まさに桃源郷といえる風景だったのでしよう。

陶淵明の「桃花源記」は、「武陵」の漁師が舟で川の路に迷い、「桃花の林」を過ぎ、社会から隔絶されて平和に暮らしている人たちを発見するお話です。生駒山人は明らかに稲田村をこういつた場所へと続く桃林に見立てています。舟に乗っているのが大坂方面から来た人たちとすれば、桃林を抜けた所に住む河内の人々は、陶淵明の描く村人に当たります。

この二首を含め、「河内八景」は次の八つの名所を詠んでいます。いうまでもなく「河内八景」という題は「瀟湘八景」に倣ったもので、日本各地で「八景」が作られていました。

「河内八景」の四首については、月、雪、雁、鐘という文字が共通していることから「瀟湘八景」で対応するものが推測できます（「瀟湘夜雨」「山市晴嵐」「漁村夕照」「遠浦帰帆」に関しては、はっきりとはわかりません。）

河内八景

瀟湘八景

〔駒嶽雲横〕（生駒山）

〔二丈月升〕（二上山）……洞庭秋月

〔葛城雪擁〕（葛城山）……江天暮雪

〔倭水雁落〕（大和川）……平沙落雁

〔南山烟斜〕（高尾山）

〔高安鐘鳴〕（高安の里）……煙寺晚鐘

〔稲田桃華〕（稲田村）

「天河流遠」(天野川)

四天王寺大学日本学科漢字文化学ゼミでは「河内漢詩漢文名所づくり」というプロジェクトを行っており、大学のサイトで「二丈月升」「倭水雁落」を紹介しています。このような取り組みが、もっと広く行われるべきではないでしょうか。

関西は歴史の古い名所が数多くあります。名所図会の先駆けとなった『都名所図会』はもちろんのこと、『和泉名所図会』『摂津名所図会』など、名所図会は関西の名所をカバーしています。その挿絵は観光案内などに用いられていますが、挿絵に記された文字は読まれないことも多いのが現状です。

日頃漢詩に親しんでいる皆様方が、こういった名所図会を片手に名所を訪れ、そこに記された漢詩を積極的に紹介して下さるよう、切に望みます。



近畿漢詩連盟令和5年度総会
5/26 於クレオ大阪西



「生駒山人の詠んだ河内」
講演風景

編集後記

日本人の平均寿命は、厚生労働省が発表した2023年の令和4年簡易生命表によると男の平均寿命は81・05年、女の平均寿命は87・09年です。

女性75歳の平均余命は15・67年、男性の平均余命は12・04年となっています。

我々も高齢化の社会現象の真ただ中にいます。願わくは元気に楽しく年を重ねたいものです。

認知症予防のポイントに「達成感を味わう」「他人と交流する」などの知的活動は脳に良い刺激となり有効な予防法となるそう

です。

近畿漢詩連盟での会員各位の闊達なる活動こそ認知予防対策の有効なる解であると信じています。

本誌出版に際し会員各位のご協力により本号が完成致しました。御礼申し上げます。

私、会報13号以来23号までを担当して参りました。能田会長より会報の版下作成を依頼されてより山内会長23号までを担当して参りました。本号をもちまして新任の方にバトンタッチ致しました。

紙上をもってここに御礼申し上げます。有難うございました。

(野田三郎)

近畿漢詩連盟会報 第24号

令和六(二〇二四)年四月一日 第一刷発行

発行人

近畿漢詩連盟

〒六一七-〇八二五

長岡京市一文橋一-一〇-四三-六五一

電話 〇九〇-五二四七-六三七三

編集責任者

会長 佐藤峰雄

印刷 京都市洛南障害者授産所

電話 〇七五-六七一-八四三九

